

青い鳥の
ロンド



Rondo of Blue Bird

緋野
晴子



もくじ

青い鳥のロンド・目次

栄の魔女	9
セントラルパークのクリスマス	17
家庭	38
キャリアアウーマン	51
アタック	64
動物園	72
灰色の鳩	85
夢子と栄の貴婦人	101
夏の底	115
諍い	130
病気	148
秋の終わり	168

七色の瞳 179
青い鳥のロンド
あとがき 217

194

青い鳥のロンド

青い鳥のロンド

栄の魔女

十一月の透明な光が、ひっそりと街に浸みこんでいる昼さがり。

栄の街は、いつもと少しも変わらないように見えた。絶え間なく行き交う人々、次々と通過していく車の流れ、果てしないビルを東西に割いて延びるセントラルパークと、その中心に聳え立つテレビ塔、パークの両側を守るように並んだ広葉樹の林。晩秋のひんやりとした空気の中に、街はいつもどおりに佇んでいた。

私は、担当していた作家のなかなか捗らない筆を急かして、雑誌の新年号に載

せる原稿をようやく受け取ってきた。その帰り道だった。自分の役目がなんとか無事に果たせたことにほっとしながら、いつものように、パークの中を横切っておフィスに戻ろうとしていた。

と、銀杏の樹の下を通りかかった時、急に足元から捲い上がるように、小さなつむじ風がたった。すっかり黄色くなっていった銀杏の葉がいっせいに枝を離れ、しばらく宙で渦を巻いてから、ばらばらと私の頭上に降りかかってきた。

(あ、)

不意に何か、大切なものが胸をかすめたような気がして、足が止まった。

(何だったろう?)

見上げる銀杏の樹はすでにおおかた葉を落とし、削げて剥き出しになった細い梢が、つんつんと天を刺すように突き立っていた。

パークのテレビ塔付近に最近オープンしたイタリアンの店に入って、サーモンクリームパスタを食べた。こうしてたまに一人でとる気ままなランチが、私の日常のささやかな息抜きになっていた。かなり遅くなった昼食だったが、サラダとコーヒー付きのお得なランチタイムに間に合ったことに満足し、さて、と店を出

たところで、ポケットのスマホがコケッココーと鳴いた。メールだ。

なんと、翔子ではないか。

大学時代のESSサークルの友人たちの顔が、私の脳裏に一気に蘇った。翔子の少し天然がかった短い髪。理知的な唇が、なめらかなイングリッシュで出来損ないのジョークを放つ。すると、「ああ」と言わんばかりに眼と口を丸く開き、それから大げさに頷くお茶目な百音。その、おっとりとした丸い顔。その横で頬杖をつきながら、ちょっと首を竦めて批評してみせる、麗ちゃんの女優にも劣らぬきれいな微笑。

「オ、翔子サ、ヴェリー、グッ、ジョブ！」と、わざと情けない顔を作ってからかう、私の声も聞こえてきた。それから私の耳の中は、弾ける笑い声で一杯になった。

卒業してしばらくは時々メールを交わし合っていた仲間たちだったが、それぞれの生活に取りこまれていくうちにしだいに隔たり、もうここ何年も、年賀状以外には互いに音沙汰なしになっていた。

急にわくわくしてきた胸をなだめながら、私は小走りにセントラルパークの小川へと急いだ。そうでなくても行き交う人の少なくないこの付近だったが、テレ

ビ塔の下では、早くもクリスマスの飾りつけをする人たちが、豆電球のたくさんついたコードを引っ張って忙しそうに動き回り、落ち着ける空間といえは、パークの中央に作られた小川のほとりだけだった。

バッグと封筒を横に置いて、ゆったりとベンチに座り直してから、私は改めてメールを開いてみた。期待に頬がゆるむ。

「女の」と付された特殊な人生があるなどは露ほどにも思わなかったあの頃を、懐かしく思い出すきょうこの頃。皆様はいかがお過ごしですか？ 卒業から早、八年の歳月が流れました。今年はみんな三十歳ですね。この三十という輝かしい節目を記念して、我らESSの最高にいい女四人で集まりませんか？ 場所は栄の街を見下ろせるテレビ塔の四階。クリスマスイヴの前日に、タワーレストランのランチコースを予約します。万難排して来られたし。よろしく」

翔子らしい無駄のない言い回しは、秀でた額と自信に満ちた涼しい眼を髣髴とさせた。名古屋駅前にそびえ立つミッドランドスクエアの三十七階で、さっそうと働く彼女の姿が、眼に浮かぶようだった。私の勤める出版社は栄にあるのだから、私たちは、会おうと思えばいつでも簡単に会えたはずだった。それなのに、そのうちと言いながら、結局一度も会ってはいない。それは機会がなかったか

らというよりも、互いにゆとりがなかったからだろう。翔子にとっても私にとっても、それだけ必死な年月だったということだ。

(八年か)

私は浮世の非情を思つて溜め息が出た。あのポジティブの塊のようだった翔子をして、女のと付された人生を考えさせるのだ。それがどんなことを意味しているのか、聞かずともおおかた想像できてしまう自分が、やはり八年を経たここにいた。翔子でさえと思うと、自分だけではなかったという軽い安堵とともに、何かやりきれないような気持ちにもなった。

小さな溜め息を一つ吐き捨ててスマホをポケットに戻し、にわかに重くなった腰を上げて、大学時代の仲間たちの顔をぼんやりと思い浮かべたまま、オフィスへ向かつて歩きだした。

と、誰かが私の上着の裾を、後ろからつんつんと引っぱった。

(え?) とふり返つてみた私は、間近に迫つたその顔を見て、驚きで固まってしまった。

(栄の魔女!)

あの栄の魔女が目の前に立って、銀灰色の瞳で私をまっすぐ見つめていた。

襟元に黒いふわふわの羽の立ったセーターを着て、黒いロングスカートをはき、フードのついた足元まである黒いローブを羽織った魔女は、きょうはフードを背中に落としているため、無造作な銀髪が波打ちながら、ローブの上にはさばさと広がっていた。何の臆面もなく私の眼をじっと見つめるその瞳は、黒い瞳孔のまわりに、無数の星を集めたような銀灰色の虹彩が厚く取り巻き、じっと見つめられると、その奥の闇に体ごと吸いこまれてしまいそうだった。

目を見開いたまま言葉を出せずにいる私に、魔女はとても白くて骨ばった指を一本持ち上げ、それからスーっと横に滑らせて、今まで私のいたベンチの上を指して止めた。魔女の細長い指の先には、私の置き忘れた封筒があった。

「あ、ああ……あれ、ありがとうございます」

どぎまぎしながら、私は上ずった声で言って軽く頭を下げた。魔女は無言でわずかに頷いたかのように見えたが、錯覚だったかもしれない。皺の多い蟬人形のような顔は、固まったままピクリとも動かなかった。代わりに、抱いていたシベリア猫の細い眼が、キロリと私を見た。魔女に似た銀色の眼。

栄の魔女は一年の半分は白づくめになる。白いワンピースにレースやシースルーの薄物を掛け、つばのとても大きな白い帽子を被っていた。灰色の猫を連れて

栄に頻繁に現れる彼女を、この付近のビルにオフィスを持つ者たちは誰からともなく、「栄の魔女」とか「栄の貴婦人」などと呼んでいた。彼女と眼を合わせるど何かが起こるといふ噂まである、ちよつとした有名人だ。

「何かって、どんなことですか？」と職場の先輩に聞いたことがある。先輩は、「何かと言ったら何かよ。いいことか、悪いことか、それは誰にも分からないわ、魔女が決めることだもの。でも、大きなことよ。彼女の魔力がね、見つめられた人の運命に重大な変化をもたらすのよ」などと思わせぶりな口調で言い、「ああ、いいことだと分かっていたら、私も見つけて欲しいわあ。なんとかならないの？ この毎日」と眼鏡をはずし、椅子に腰かけたまま大きな伸びをした。私も時々、遠目に彼女を見かけることがあったが、きょうのように間近で対面したのは初めてだった。服装の奇妙さもさることながら、銀灰色の瞳のせい、ハーフだろうと思われる端正で皺の多い蒼白な顔のせい、この世離れした印象があり、人が「魔女」と呼ぶのも分かるような気がする。感情の籠らない冷たい瞳は、けれど今、近くで見ると魔物的というよりは、どこか高貴な感じのする冷たさだった。

とにかく、彼女のおかげでドジを踏まずに済んだ。眼を合わせると何かが起こ

るのではなく、起こるはずの危機が回避されたのだから感謝しなければならぬ。それでも、先輩の言葉を信じたわけではなかったが、黒づくめの異様な姿と、動かない表情、冷え切った瞳は、なんとなく私を不安にし、逃れたいような気分させた。

危うく置き忘れるところだった原稿をしっかりと胸に抱え、臉に焼きついてしまったその姿を振り払いながら、私は急ぎ足でオフィスへ戻った。

セントラルパークのクリスマス

—

栄はクリスマス一色になっていた。地下街の上部はリースや金銀のモールで飾られ、どの店にも独自のクリスマス商品が並べられて、何やら選ぶ家族連れや待ち合わせをしている人たち、談笑しながら通り過ぎる若者たち、それぞれ楽しんでにざざめきあっている中を、私は久々に浮き立つ思いでテレビ塔へと向かっていた。地上へ出る直前にトイレに立ち寄り、身なりや化粧をもう一度念入りに点検した。鏡に映った自分の顔を改めて眺めてみると、八年という歳月がけっして短くないことを、嫌でも思わざるを得なかった。いつまでも変わらないもののように思いこんでいた若さに、いつの間にか翳りがさし始めていたことに小さな焦燥を覚えたが、私は、（まだ、まだ、十分にけるわよ）と、鏡の中の自分を励ました。服装は、少し地味だったろうかと思っただが、ことさらに洒落るのはいかえって女を下げるような気もした。

(これでよし!)と、口元をきゅっと引きしめ、それからにっこりほほ笑んでみると、鏡の中の女はまずまずに見えた。

手洗い場の隅の牛乳びんにポインセチアがひと枝挿してあり、それが曇りのない鏡に赤く映りこんで、華やかさを添えていた。

[Cheers!]

四つのシャンパングラスが高々と掲げられ、チンと軽い音をたてて合わさった。麗ちゃんの結婚式以来、四年ぶりに揃った四つ葉たちだ。無数の泡が立ち上るシャンパングラスの中に、かつての青春の喜びが弾けていた。

四つ葉会と名づけたこの会のメンバーは、私(菜摘子)と翔子と麗ちゃんとお音。私たちが卒業を迎えた頃、バブルのはじけた日本は不況の波に飲みこまれ、就職氷河期と呼ばれるほどに若者の就職率は落ちていた。大卒女子にはことさら厳しいものがあり、E S Sの女子たちの半数が新卒での就職を諦め、就職できた者のうち六割は、二次・三次希望の職場に妥協していった。非正規での就職もけっして珍しくなかった。結局、希望どおりの道に進めたのは我々四人だけで、希望どおりの会社に就職できたのは私と翔子の二人だけだった。

経済学部の子は名古屋を日本の拠点とする外資系商社に、文学部の私は名古屋では唯一の、書籍から雑誌まで幅広く手がける出版社に就職した。同じく文学部だった麗ちゃんは、ボランティアで参加した愛知万博をきっかけにイベント関係のバイトを始め、卒業と同時にイベントプランナーとして起業。教育学部の音楽科でチェンバロ奏者だった百音は、ほとんどの学友が教師をめざす中、奏者であることに拘って実家で音楽教室を開き、バロック仲間を募って演奏活動を始めたのだった。

ほんのり甘い液体はほどよく冷えていて、口の中でいっせいに弾ける細かい泡が、芳醇な香りを放ちながら喉元を下っていく。その快さに、私たちはしばし浸った。

ハアっと、ひと息ついてからグラスを置くと、向かい側に座っていた麗ちゃんが、芙蓉のようなふんわりした笑顔で私を見ていた。艶のよいロングヘアにエレガントシックなワンピース。肝斑ひとつ無さそうな白い頬。私のような、『まだ、まだ、いける』といったレベルではなく、完璧に美しかった。麗ちゃんはオードブルのひとつを優雅に口へと運び、それから再びシャンパンをひと口飲んだ。

「それで、翔子と菜っちゃんは どうして いたの？ 私と百音は 時々 イベントで一緒だったけど、二人とは この四年、一度も 会わなかったじゃない」

話題を 振られた 翔子は、ハアアと 大げさに 息を吐き、まいった ような 顔を して みた。

「どうも こうも ありや しません っ。 もう 憔悴の 極み。 あのね、 購買部 っという ところ に いる だけ けど、 必要な ものを 取引 先から 買う わけ ね。 その時、 契約で 有利 になる ように、 先方と 打々 発止の やりとりを する のよ。 商社 の いちばん 面白い 部門 だけ けど、 面白い 以前に まず たいへん なの、 これが。 私なん かも まだ 補佐 だけ けど、 それでも たいへん。 情報力 と 時間 の 勝負 だし、 臨機 応変 が 求め られる し、 必死 なのよ。 オフィス の 中は ひっきり なしに 電話 が 鳴って、 大声 が 飛び 交って、 まるで 戦場 みたい だわ。 そこで 私 の 美貌 は どん どん 錆び ついて いく わけ」

翔子は そう 言っ て 自嘲 的に 笑った。 だが 翔子 の 美貌 は 少し も 錆び ついて いない どころか、 学生 時代 より ずっと 洗練 されて、 自信 に 裏打ち された キャリア ウーマン 特有 の 美しい オーラ を 放つ て いた。 受け 持った 仕事を きびきび と こなす、 翔子 の 働き ぶり が 目に見え る ようで 眩し かった。

少し 気後れ したが、 こんど は 私 が 話す 番 だった。

「翔子に比べたら私はずっと地味で、と言うより悲惨よ。長いこと、お茶くみや、使い走りや、原稿の校正ばかり。そのうち取材に同行させてもらったり、インタヴューとか資料集めとかを手伝わせてもらえるようになったけど、さてこれからっていう時に子どもができちゃったでしょ。育児休暇が明けて復帰してみたら、まさかの部署替えよ。うちの雑誌は二種類あるの。総合誌と婦人誌。総合誌を希望して入ったのに、何の打診もなく婦人誌に替えられていたのよ。信じられる？ 家庭を持って子どもも生まれたことだから、婦人誌のほうがいいだろうって言うの。勝手に決めつけないでと思ったわ。抗議してみたけど無駄だった。育休中の私の代わりに新卒の男子が入っていて、もう戻る場所がなかったのよ。」

『置かれた場所で咲けない花はどこに置かれてもだめだ』なんて言われて、なら、やってやろうじゃないの、って居直るしかなかったわけ。悔しいけど、希望を通すにはまず、与えられた仕事で実績をあげるしかないものね。と言っても、新しい部署ではまた新人扱いでしょ。このごろやっと、企画の部分的な記事を書かせてもらえるようになったところよ』

「ふうん、会社ってたいへんなのね。そういえば翔子のメールに『女の』と付された人生なんて、思わせぶりなことが書いてあったけど、翔子も何かあった

の?」

興味深げに百音が聞いた。百音はいくぶん体型がふっくらしてきた以外は、服装の趣味も、屈託のない童顔も、学生時代から少しも変わっていない。おっとりしたままでいられる百音の生活が想像できた。逆に麗ちゃんはほっそりしてきて、フェミニンなお嬢さんという雰囲気から、少し翳りを含んだ大人の美女に脱皮していた。環境が人を作るのだ。みんなの眼に私はどう映っているのだろうか？原稿と睨めっこばかりしている、自分の地味な生活を思った。

「それなのよ。菜っちゃんの話聞いてますます悩ましくなってきたわ」
翔子が深刻そうな顔で応えた。

「実はね、私、妊娠しているの」
「まあ、おめでとう！」

三人はいつせいに声をあげ、グラスを掲げた。翔子も微妙な笑顔でグラスを合わせ、また、チン、と乾いた軽やかな音がした。

「まあね、確かにめでたいし、嬉しいのよ。ただ、問題はやっぱり仕事なの。私もようやくこの世界に慣れてきて、ほんとのことを言う自信もあるわ。ステツプアップするのは今からよ。それが出産で途切れるとなると、そのあとどうなる

のか？　ボスにはまだ妊娠のこと話してないのよ。不安だわ」

「分かるわ。確かにキャリアにとってはマイナスよ。でも、あとに延ばしたって同じこと。出産には適齢期ってものがあるし、仕事人生は長いんだから、今産んでおくのが正解だと思うわ」

「菜っちゃんの言うとおりよ。うちはもう二人もいて子育てはたいへんだけど、それでも子は宝よ」

「百音は人に使われない仕事だし、実家でお母さんに子どもたちを見てもらっているから恵まれているのよ。私の場合はそのはいかないもの」

「私はことさらに子どもが欲しいとは思わないけど、でも、できたらできたでいいと思うわ。出産も人生の輝かしい一大イベントよ。それを楽しまないって方はないでしょ。仕事は少しくらい遅れたって、翔子ならすぐに挽回できるわよ」

子どもはことさらに欲しくはないと言った麗ちゃんの言葉が、少し心に引っかった。自分だけがまだ妊娠もしていないことに傷ついているのだろうか？　ふとそう思ったが、麗ちゃんの口調からは何も感じ取れなかった。

「そうかなあ。みんなにそう言ってもらうと、なんだか元気が出てくるわ。ようし、頑張るぞ！　そうよね、子どもか仕事かなんて時代じゃないわよね。大事な

ものはどっちも手放さないわ」

そうよ、とまた乾杯のグラスが、チン！ と音高く鳴った。

私たち四人は結婚も早かった。翔子が一番のりで、大学時代からつき合っていた彼と、卒業と同時に二十二歳で結婚。彼は県庁の職員になっている。働きたい女性ナンバーワンの翔子がもう結婚？ と当時は意外な気がしたが、考えてみれば、合理主義の翔子だからこそその決断だったのだと今は思う。そのほうが就職してから結婚でのごたごたせずに済むし、職場にも、寿退社などしないと初めから宣言したようなものだから。

次は百音。麗ちゃんのプランニングした自動車関係のイベントでチェンバロを弾いた時、その姿に一目惚れした会社員の彼に交際を申しこまれ、一年後にゴールイン。二十三歳だった。

そして三番手が私。夫の護まもとは、互いに名古屋城関係の取材で出会った。彼は新聞社に勤めていて、二年交際してから二十五歳になった春、結婚した。

最後になったのは意外にも麗ちゃんだった。彼女ほど華麗という表現の似合う女性がいるだろうか？ 容姿もよかったが服装や会話のセンスもよく、女でも見とれてしまう。大学時代の彼女の周りにはいつも男子学生が群がっていて、だか

ら最初に結婚するのは麗ちゃんに違いないと、私は当然のように思いこんでいたのだ。

だが、順番こそは最後だったが、その結婚式は思ったとおり最高に華麗だった。お相手は日系の商社マンで三十五歳。年収一千万以上という話からすると、出世コースに乗っていたのだろうか。二十六歳の彼女より九つも年上の彼には落ち着いた大人の雰囲気があり、私たちの眼にも素敵な男性に映った。他の三人は同い年か一つ違いという、歳の差のない相手と結婚していた。

イベントプランナーの麗ちゃんが自分のためにプランニングした結婚式が、素晴らしくないはずがなかった。それが四人の揃った最後の時でもあったため、乾杯のグラスを置くと話は自然にそこへと向かい、華やかな思い出話で盛り上がった。

「私ねえ、感動したのよ、あの時は。白い鳩がいつせいに放たれて飛び立った時、その中に一羽だけ青い鳩がいて、高い空に吸いこまれるように羽ばたいていったでしょう？　なんだか分からないけど胸の中が熱くなってきて、私、涙ぐんじゃった」

ロマンチストの百音が言った。

「私もよ。みんなの結婚式もそれぞれよかったけど、あの鳩のことが一番印象に残っているわ。今でも時々思い出すのよ」

私もそう言っ、白い鳩の間をぬって舞い上がる、記憶の中の青い鳩の姿を追いかけた。私は実際、その光景を何度か思い出すことがあった。けれど不思議なことに、それは思い出すたびに感動の色合いを微妙に変え、今ではいくらか悲しみに近いような感慨をもって思い出されるのだった。

「まあ、いちおう、プロのイベントプランナーですからね」

麗ちゃんは澄ましてグラスを取り上げ、ほんの少し口に含んだ。が、すぐにまた唇を離して言った。

「私は百音が羨ましいわ。結婚しても、お母さんになっても、ちっとも変わらず百音のままって感じなんだから」

みんなは改めて百音を見た。百音は、

「母のおかげで、やりたい放題に生きているからね」と、首を竦めて笑った。

「教室も順調だし、演奏活動はもちろん楽しいわ。時々麗ちゃんが、イベントの中に私たちの演奏を組みこんでくれるので、助かっているの。唯一の悩みは夫ね。私の音楽を趣味だと思ってくれないから」

夫という言葉が出ると、四葉たちはみんな、急に萎れたように頷いた。

「男って、厄介な生物よね。自分のことが何より優先されるべきだと思っているの。妻の仕事は道楽くらいにしか思っていないのよ。私の仕事の話は聞きたがらないし、自分の帰宅はほとんど毎日十一時過ぎなのに、たまに早く帰った時に私が外出していると、ものすごく不機嫌になるの。夫の早く帰る日が分からないんだから、私のほうで仕事を調整しようがないのに」

麗ちゃんのきれいな顔が憂いに曇るのを見て、翔子が言った。

「うくん、分かる気がするわ。麗ちゃんのところは特に旦那の稼ぎがいいから、なんで妻が仕事しなきゃならないんだ、俺の世話に専念しろって感覚なんでしょう？　うちの社もそういうタイプの男がうじゃうじゃしているわ。商社マンの仕事ってほんとにキツイから、妻には安らぎを求めるのね。分からないではないけど、でも、それってやっぱり一方的な甘えよね。妻だって夫に理解を求めているのに、そこは無視。でしょ？」

「うちだってそうよ。うちは平凡な会社員で稼ぎも普通だから、家計の助けになる教室の仕事には文句を言えないのね。でも不満はあって、演奏活動となると、また道楽かっていう顔をするの。演奏こそが私の人生のメインなのに。あのプロ

ポーズは何だったんだらうって時々思うわ。女の人生にとっての最大の障害は、子どもや社会制度なんかじゃなくて、家の中にいる男なんじゃないかしら？」

百音が会話を引き取って、考えこむように言った。

「菜っちゃん夫婦は仕事が似ているから、解り合えていいんじゃない？」

そら来た、と思った。私はしかたなく重い口を開いた。

「そうでもないのよ。確かに私の仕事に文句は言わないけど、家事や育児をぜんぜん負担してくれないの。余裕がある時は、言えば手伝ってくれることもあるんだけど、とにかく自分が優先で、家事の責任者は私と勝手に決めつけているのよ。もっとも、あんな不規則な仕事じゃ、たいした助けにはならないだろうけど。それでも、協力して一緒にやろうっていう気持ちだけは持つべきだと思うの、共働きなんだから。今どき珍しい古代の遺物みたいな男よ」

「古代の遺物とは笑える表現ね」

翔子がほんとうに可笑しそうに笑った。

「笑い事じゃないわ。うちもそうよ、口を開けば私への注文ばかりで。夫っていったい何なの？」

百音が溜め息まじりに言うのと、麗ちゃんは澄まして言った。

「保険よ。一人じゃ不安だから、しかたなく掛けている割に合わない保険。」

「ふうん。そうしてみると、私の夫が一番ましなのかなあ？ 世話をやかれなくても平気だし、いちおう私の仕事を応援してくれるし、家事にも抵抗がないから、片づけ以外は半分くらいやってもらっているかな？」

翔子の言葉に、残りの三人は、「え〜！」と、羨望の眼を見開いた。

「そう、抵抗はないのよ、抵抗はね。ただ、片づけ能力が非常に低いという点にさえ眼をつむれば、まあ、いい夫なんでしょうね」

「もちろん！ 片づけ能力が低いだけならいいわよ。翔子は運がよかったわ。それなら子どもを産んでもきつとやっていけるわよ」

私は、妬ましいほど羨ましいと思った。

「そう言うけど、片づけ能力が非常に低いついていうのは、同居者にとっては大きな問題よ。気難しくて身辺整理はきちんと自分でできる夫と、どっちが楽だろうって時々真剣に考えるもの」

翔子は言って、軽い溜め息をついた。三人は片づかない家の中を想像して、ふんふんと頷くのがあった。

夫の話で空気がかなり萎んだところで、ディナーも終わりに近づいた。私たち

は気を取り直し、グラスを思いきり高く持ち上げて最後の乾杯をした。

「職場のジェンダー差別にも負けず」

「子育てにも負けず」

「夫の無理解・無能ぶりにも負けず」

「三十代をあでやかに生きよう！」

「最強の四つ葉たちに」

四人は大きく声をそろえ、グラスを合わせた。

「To Our Happiness！」

チン！

二

私たちはテレビ塔を降り、一階にあるスイーツの店で、学生時代の思い出話に
もう一度盛り上がった。近況よりも思い出のほうが、生き生きと楽しめる四人だ
った。